

<礼拝説教—9月 7日>

人の知恵だけでは信じ切れない！

初代の教会—83

使徒言行録 18章 1～5節 コリントの信徒への手紙 I、2章 1～5節

武田 真治

## 1、違和感

今日より 18 章に入ります。伝道者パウロがいよいよコリントの街に入り、1 年半に渡る伝導を開始します。ただ、そのコリントに来た時のパウロの様子については少々違和感のある言葉が使われています。即ち「その後、パウロはアテネを去ってコリントへ行った」(1 節) です。

どこに違和感があるかと申しますと、「アテネを去り」という点です。今までほとんどユダヤ人たちの迫害や騒動を起こされ捕縛される危険を察知した弟子たちによって送り出されて来ました。アテネの町に来たのもベレアの町でユダヤ人たちが群衆を煽動して暴動を起こそうとしているのを知って、ひとまずパウロだけでも無事に逃がそうと弟子たちが守りながらアテネに送り届けたのでした。同じ伝道隊のシラスとテモテはまだベレアに残ったままでした。このように付加抗力によって次の町へと伝道地を移して来ました。しかし、今回のコリント行きは、迫害や官憲の圧迫などの不可抗力がない状態で「アテネを去って」来たとなっているのです。そこに違和感があります。ここで用いられている「去る」は（自ら離れる、別れる）ことを意味し、使徒言行録ではこれまで一度しか使われていません（一章四節）。ということは、パウロが自らの意志でアテネを離れてコリントに来たということになります。何かあったのだろうかという疑問を感じる表現なのです。

## 2、パウロはその場を立ち去った

当初、アテネでの伝道はまだ到着していないシラスとテモテが来てから（＝伝道者が揃ってから）始める予定でした。パウロも「できるだけ早く来るように」と二人に指示を出しています（17 章 15 節）。ですから、「パウロはアテネで二人を待っている」

（同 16 節）状態であったのでした。ところがアテネの町の至るところに偶像があるのを見て憤慨して「会堂でユダヤ人と論じ、広場では居合わせた人々と毎日論じ」（16 節）始めてしまったのでした。つまり、一人で伝道を開始してしまったということです。

これは今までにないことでしたが、それでもやがて二人が来れば、本来の伝道の形になるはずでした。

ところが、なんと今日の箇所「パウロはアテネを去ってコリントへ」行ってしまったとあるのです。まだシラスとテモテはアテネに来ていないのです。彼らをアテネで待っている約束だったのではないのでしょうか。にもかかわらず、勝手にアテネを離れてしまうのです。アテネを去るということは、もうアテネでの伝道は止めたということです。彼一人でそのような結論を下してしまったということになります。このパウロの行動には更に違和感を抱きます。どうしたのか、何かあったのだろうか。

### 3、「私は衰弱し、恐れに取り付かれ」

この時のパウロの状況について、彼自身が振り返って述べている文書があります。それが先程もう一箇所読んで頂いた『コリントの信徒への手紙一』の2章1節以下です。特にその3節には「そちら（＝コリントの街）に行ったとき、わたしは衰弱していて、恐れに取り付かれ、ひどく不安でした」とあります。アテネからコリントに行った時の彼の状態は最悪であったと自ら告白しています。解説者の中には、コリントの街に入ったことでそのような状態に陥ったと採る人もいますが、そうだとすると既にアテネから彼の状態はあまり良くなかった、下降気味であったことは言えるのではないのでしょうか。少なくとも、勝手にアテネ伝道を切り上げてしまった背景には、肉体的にも精神的にもかなり追い込まれた状況にパウロがあったことが想定できます。いったい何があったのでしょうか？

そのためにもう一度、アテネ伝道を振り返ってみますと、アテネの町中にある偶像に「憤慨して」一人で伝道を始めたことは既に見ましたが、その際、ユダヤ人の会堂で説教をするというこれまでの伝道方法だけでなく「毎日」広場で居合わせた人々と議論しています。特にアテネの町にたくさん居た哲学者たち（エピクロス派やストア派）と討論しています。22節以下に記録されている彼のアレオパゴスでの説教もギリシアの哲学詩を引用しながら神様についての議論を戦わせています。それらの様子はこの哲学の都（ソクラテスとプラトンを生み、アリストテレスがわざわざここに移り住んだ）で自らの知恵と知識を総動員して知識人や住民たちを説き伏せよう、論駁しようとする姿が浮かび上がります。確かに、このアテネの町でキリスト教こ

そまことの教えである、真理であるということが論証され、実証されればギリシア全体、ローマ帝国全体に与える影響は計り知れないものがあつたでしょうから。

ところが、彼の説教もイエス様の復活に話が及ぶと「ある者はあざ笑い、ある者は『それについては、いずれまた聞かせてもらうことにしよう』」というような態度しかから受けなかったのです。それで彼は「その場を立ち去った」のです、そしてアテネを「去って」しまうのです。そこにはアテネに対する失望と幻滅の他に、彼自身の無力感や挫折感もあつたように思えます。それ故「わたしは衰弱していて、恐れに取り付かれ、ひどく不安でした」となつたのではないかと。

#### 4、挫折を乗り越えて得たもの

ただ、そのように自らの弱さを告白している『コリントの信徒への手紙一』の2章1節以下で、同時に彼が述懐していることは、「兄弟たち（＝コリントの信徒たち）、わたしもそちらに行ったとき、神の秘められた計画を宣べ伝えるのに優れた言葉や知恵を用いませんでした。なぜなら、わたしはあなたがたの間で、イエス・キリスト、それも十字架につけられたキリスト以外、何も知るまいと心に決めていたからです」（1～2節）です。これは、アテネでの伝道の結果、彼が教えられたあり方であり、挫折を通して達した確信であつたのではないのでしょうか。実際、彼が述懐しているこの箇所の直前の一章で「ユダヤ人はしるしを求め、ギリシア人は知恵を捜しますが、わたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝えています。すなわち、ユダヤ人にはつまずかせるもの、異邦人（＝ギリシア人やローマ人など）には愚かなものですが、ユダヤ人であろうがギリシア人であろうが、召された者には、神の力、神の知恵であるキリストを宣べ伝えているのです」と語っています。これは、自分の伝道姿勢を公にする宣言文のようです。愚かといわれようとも、侮られようとも、ただただ愚直にキリストを、そしてキリストの十字架を宣べ伝えると。それ以外は自分にはないのだと。私にはこのようなパウロの宣言（ある意味での開き直り）は、この厳しく、そして自分の知恵と知識で対抗しようとしたアテネ伝道での経験が大きく影響しているのではないかと思えるのです。

このパウロが到達した真理は、私たちの伝道姿勢としても大事なものではないかと思ひます。知恵に知恵で対抗するのではなく、また相手を議論で言い負かすことが伝

道ではなく、愚直にイエス様のこと、十字架と復活を宣べ伝えていくことが本筋であると、それを抜きにしてどのような知恵の言葉を駆使しようと、あるいはユダヤ人が求めたような「しるし (= 奇跡や実績)」を為そうとも、それは本物ではないのだと。

確かに、キリスト教も信仰ですから、哲学や学問的な見地から見れば、侮られ、あざ笑われるものでしょう。復活なんて信じているのかと！しかし、その方々の意見や考えを聞き、受け止めながらも、愚直に信じることに徹して生きるあり方を止めるわけには行かないと改めて思われます。

## 5、何一つむだなことはない！

以上のように、パウロが行ったアテネ伝道は、その実績だけを見れば大きな成果をもたらしませんでした。他の伝道地と比べれば失敗だったと言い得るでしょう。

しかし、その失敗を通してパウロはとても大事なものを与えられたのではないかと思います。少なくとも、自らの姿勢やあり方を問い直された出来事であったと言い得るのではないのでしょうか。

私共もうまく行かないと思うことや失望に終わる結果となってしまうことがあります。しかしその時こそ、もう一度何が自分にとって大切なのか、どうあることが自分たちにとってふさわしいのかを問い直す時ではないかと思えます。そして、後から振り返った時に、あの時も自分には必要であった、神様は何一つむだなものを自分に与えられることはなかったと告白できる者でありたいと願います。